

Title	断りメールの構成から見たタイ人日本語学習者の語用論的能力
Author(s)	ワラシー, クンランパー
Citation	大阪大学言語文化学. 2014, 23, p. 59-72
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/77759">https://hdl.handle.net/11094/77759</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 断りメールの構成から見たタイ人日本語学習者の語用論的能力\*

ワラシー クンランパー\*\*

キーワード：断りメール、タイ人日本語学習者、語用論的能力

Taking the view point of interlanguage pragmatics, this study aims to investigate pragmatic competence of Thai learners of Japanese language in refusing requests via email. In this study, refusal is considered as an act that involves not only the declining of a request but also the maintenance of relationship with others. Thus, it can be said that refusal is one of rapport - threatening behaviors.

Participants in this study were Japanese students (JJ) and Thai learners who have experience of studying in Japan (TJ). Participants were asked to refuse request from acquainted teachers and friends respectively via email. TJ were also requested to write a refusal email in their first language, Thai (TT), to serve as baseline data.

Comparison of structure and semantic formula in refusal emails between JJ and TJ demonstrated that both groups adopted the strategy of “explicit reasoning” to indicate societal rights to refuse, as well as “relationship maintenance” strategy to manage and maintain relationship.

The results of analysis on learners' pragmatic competence are as follow.

(1) In terms of adjusting structure and semantic formula according to the social status of the person who made the request, the results indicate that TJ used not only strategies similar to JJ, but also methods differing from those of JJ. In addition, social status of the person who made the request was also found to have an influence on rapport management strategies.

(2) In terms of selection of structure and semantic formula, three distinct frameworks of “pragmatic transfer”, “accommodation” and “peculiar behavior” were employed. Pragmatic transfer or the influence of learner's first language was less likely to occur. On the other hand, analysis found that adaptation of refusals by TJ to JJ (accommodation) and,

---

\* Analysis of Pragmatic Competence in Thai Learners of Japanese via the Structure of Email Rejecting (WORASRI Kulrumpa)

\*\* 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

peculiar behavior which is TJ's characteristic refusal that different from either JJ or TT were common.

From the follow-up questionnaire, it was found that TJ were actively attempting to select structures and semantic formulas that conform to the pragmatic styles of JJ.

In consideration of the above results, in order to raise Japanese language learners' pragmatic competence, teaching methods for writing email appropriate for the social status of the person making the request are required. Finally, I would like to propose that when writing refusal emails, learners must understand social status relationships and also be aware of the purpose and function of each sentence.

## 1 はじめに

現在の日本における大学生の生活では、先生や友達とメール<sup>1</sup>で連絡を取る機会が多い。メールは単なる近況報告のためにやり取りされることもあるが、依頼や誘いなど、何らかの返信を期待して発信されることもある。先生や友達のような重要な間柄の人物から依頼を受けたにもかかわらず、それを何らかの事情で断らなければならない場合、依頼者との関係を維持するためにどのように断るかという問題を抱えている留学生は多い。依頼に対する断りメールのやり取りにおいて、タイ人日本語学習者を対象とし、語用論的能力の分析を扱う研究はまだあまり行われていない。本研究は中間言語語用論の枠組みにおいて、日本人大学生と留学経験のあるタイ人日本語学習者<sup>2</sup>が書いた断りメールの構成・意味公式を比較対照し、学習者の現在の語用論的能力を分析する。次に、学習者はどのように依頼者との関係を維持・促進するかを考察する。本研究の目的は、(1) 日本人大学生とタイ人日本語学習者の断りメールの構成・意味公式における共通点と相違点を明らかにすること、(2) 社会的な要因による断り方の調整、及び、タイ人日本語学習者が選択した言語形式という視点から学習者の語用論的能力を明らかにすることである。また、分析結果に基づいて、日本語教育の実践に関する若干の提案も行いたい。

## 2 断りの定義と断りの対人関係的特徴

本研究では、断りを「人間関係を維持しながら、依頼に対して承諾できないことを伝えること」と定義した上で、メールのやり取りを通じた依頼に対する断りに焦点を当て

<sup>1</sup> 本研究では、「メール」はパソコンメールのみを対象とする。近年、友達との連絡には携帯メールやライン (LINE) が多用されているが、それらは先生に対してはあまり使用されていないため、本研究は先生と友達という受け手の社会的な立場に応じた書き方を比較するために、パソコンメールに限定した。

<sup>2</sup> 本研究は留学経験があるタイ人日本語学習者を対象とする。留学経験がないグループの結果はワラシー (2012) 参照。

る。断りは人間関係に対して何らかの影響を与え、対話者が互いの関係の維持、交渉を行うプロセスとして捉えられる（藤原 2004）。ここでは、Spencer-Oatey（2000）が提唱した「ラポールマネジメント」を紹介する。

言葉使用がどのように対話者の人間関係に影響を与えるのかを分析する際に、Brown and Levinson（1987）のポライトネス理論におけるフェイス（face）<sup>3</sup>概念がしばしば使用されている。ただし、フェイスには、人が属している社会に受け入れられ、かつ他者との関係を調整するという社会的な視点が欠如しているという批判がある（Matsumoto 1988）。そのため、Spencer-Oatey はより包括的に人間の対人関係の側面を捉えた「ラポールマネジメント」という概念を提唱した。

表1 ラポールマネジメントの構成部門

	フェイスマネジメント	社会的権利のマネジメント
個人的視点	資質のフェイス：他者に評価されたい欲求（積極的フェイスを参照）	公平の権利：他者に個人として配慮される権利（消極的フェイスを参照）
社会的視点	立場のフェイス：他者に社会的な立場・役割を認められ、支持してもらいたい欲求	交際の権利：他者と互いの交友関係に相応しい付き合い方をする権利

（田中他 2004 訳を基に筆者作成）

表1から分かるように、ラポールマネジメントには、フェイスマネジメントと社会的権利のマネジメントという二つの側面があり、個人的視点と社会的視点に区別される。そして、これまでのフェイスの概念に欠如している社会的視点である立場のフェイス、及び、交際の権利が加えられている。本研究が対象とする断りの対人関係の特徴は、人々のラポールが脅かされる危険性をもつ Rapport Threatening Act（RTA）であることといえる。それゆえ、断り手は個人のフェイスと権利のみならず、「学生」或いは「友達」といった社会的な立場にも配慮する必要があるのである。

### 3 分析の視点と本研究の意義

#### 3.1 分析の視点

##### 3.1.1 中間言語語用論

本研究は、学習者の中間言語の語用論的側面に焦点を当てる中間言語語用論の研究の

<sup>3</sup> フェイスという概念には他者から理解・共感されたい、他者との心理的距離を縮めたいというポジティブフェイス（positive face）と、他者に邪魔されたくない、他者との心理的距離を保っておきたいというネガティブフェイス（negative face）がある。

一つと位置付けられる。中間言語語用論では、これまで学習者の第二言語形式に第一言語形式の干渉を受けるという母語転移に焦点が置かれ、学習者の母語転移の言語形式が検証されてきた (Beebe ら 1990、生駒・志村 1993、ルンティエラ 2004)。さらに、岡崎 (1995) は韓国人日本語学習者の断りを分析し、学習者の言語形式の特徴として、語用論的転移の解釈に当てはまらない学習者の積極的な言語形式の選択があると指摘した。また、藤原 (2004)、藤浦 (2007)、ワラシー (2012) は岡崎の研究で明らかになった学習者の積極的な言語形式の選択という側面に焦点を置き、学習者の言語形式を分析する際に、目標言語と比較し目標言語にどれだけ近づいているかという語用論的転移の観点からのみ扱うのは不十分であると主張した。また、これらの研究は、「語用論的転移」の他に、学習者の母語より目標言語に近くなる「アコモデーション」、自らの母語とも目標言語とも異なる「学習者特有の言語形式」という言語形式が存在することを明らかにしている。本研究では、上記の3つの言語形式を利用し、学習者に特有の言語形式を分析する。

### 3.1.2 語用論的能力

従来、語用論的能力 (pragmatic competence) は、第二言語話者のコミュニケーション能力 (communicative competence) の主要な構成要素の一つとされる。Bachman & Palmer (1996) は言語テストの設計・開発の観点からコミュニケーション能力のモデルを提唱し、コミュニケーション能力を言語能力、方略的能力、精神生理学的作用に分けた上で、言語能力をさらに構成能力と語用論的能力に分類している。Bachman & Palmer は発話の産出を遂行する際、文の構成を正確に使用する構成能力のみならず、発話をその使用者の意図や言語使用の状況特徴に関連付ける、コミュニケーションのマネジメント全体にかかわる語用論的能力も関与すると述べている。

本研究は Bachman & Palmer の語用論的能力の定義を踏まえて、語用論的能力を「言語形式と機能を効果的に使い、話者と相手との関係や社会的な状況に応じた適切な言語使用を可能にする能力」と捉えた上で、それを具体的に分析するために、「断り」という発話行為に焦点を当てる。発話行為理論の研究者らが指摘するように、断りは必ずしも直接発話行為によって遂行されるとは限らず、「その日は別の予定があります」など、間接発話行為として遂行されることが多い。また、本研究が対象とするメールでの依頼に対する断りの場合、単に依頼に応じられないという事実を伝えるだけでなく、依頼者と断りメールの書き手の社会的な関係性に依拠して適切な言語形式を選択することが求められる。さらに、本研究の対象者はタイ人日本語学習者であるため、対象者が選択する断りの言語形式が母語からの転移によるものなのか、あるいは他の原因によるのかも検

討する必要があるだろう。そこで、本研究では、依頼者の社会的な立場に応じた断り方の調整、及び、「語用論的転移」「アコモデーション」「学習者特有の言語形式」という観点から、学習者の語用論的能力を分析する。

### 3.2 本研究の意義

これまでに行われたタイ人日本語学習者を対象とした断りの研究は語用論的転移という視点のみを扱い、学習者が使用した言語形式を分析したのみであった（ルンティナー 2004、タブティナー・加藤 2010）。本研究では、学習者による断りの言語形式の選択が語用論的転移のみによって行われると考えるのではなく、アコモデーションや学習者特有の言語形式のように、学習者による能動的な選択の可能性もあるという前提に立って分析を行う。また、相手との関係を維持・促進させるためのストラテジーを分析する対象として含めている点も、新たな視点である。さらに、タイ人日本語学習者を対象としたメールでのコミュニケーションの研究では、筆者が知る限り、依頼メールの対照研究（宮崎 2007）のみである。本研究のように断りメールの分析からタイ人日本語学習者の語用論的能力を検討する研究はこれまで行われておらず、この点でも意義があると言える。

## 4 研究方法

### 4.1 調査の概要

日本人大学生・大学院生（以下、JJ とする）と留学経験があるタイ人日本語学習者<sup>4</sup>（以下、日本語のデータは TJ とする）各 15 名（全て 27 歳以下の女性）を対象とした。中間言語語用論の先行研究は、学習環境<sup>5</sup>が学習者の語用論的能力に影響を与えることを指摘している（タブティナー・加藤 2010）。本研究では、その要因をコントロールするため、留学経験がある学習者のみに注目した。調査方法として親しい先生・友達からの「よさこい踊りに参加してもらいたい」<sup>6</sup>という架空の依頼メールを協力者のパソコンアドレスに送り、協力者がその依頼メールに対して断りメールを返信する。比較のベースラインデータとして学習者には母語であるタイ語の断りメール（以下、TT とする）も送ってもらった。最後に、TJ にフォローアップアンケートを書いてもらった。

<sup>4</sup> タイで日本語を専攻したことがあり、日本に 6 ヶ月～2 年間留学している学習者である。日本語学習期間の平均は 8 年、旧日本語能力試験 3 級～1 級に合格している。

<sup>5</sup> 中間言語語用論に関する研究では、学習環境は第二言語環境と外国語環境に区別される。前者は教室外の日常生活でも目標言語が使用されている環境で、後者は教室以外ではほとんど目標言語を使用する機会がない環境である（清水 2009）

<sup>6</sup> 『日本語の E メール の書き方』では「イベントの協力を断る」の場面は学生の生活の身近な場面として挙げられている。

## 状況説明と依頼メールの例 (対先生)

**状況説明：**大学3年生のあなたは、鈴木直美先生(30代・女性)に指導してもらって、勉強のことだけでなく、生活上のことも気軽に先生に相談しています。先生は大学祭を主催する委員会の担当の教員です。先生からの大学祭で行うよさこい踊りの参加のお願いメールが来ました。踊りの練習の日に合宿に行く予定があるため、踊りに参加するのを断るメールを書いて下さい。

**依頼メール：**

〇〇さん

こんにちは。今日はお願いがあって、メールしています。実は1月12日に大学祭があり、そこでよさこいを踊ることになっています。日本の踊りはたくさん的人数で踊るので、多くの人に参加してもらう必要があるのですが、今のところ参加人数が少なく困っています。私は大学祭を主催する委員なので、どうしても参加者を集めなければならないのです。そこでお願いなのですが、〇〇さんもこの踊りに参加してもらえないでしょうか？もし参加してもらえぬのなら、大学祭当日前の3日間、練習があるので、練習には必ず参加してほしいのです。お忙しいとは思いますが、いい思い出になると思いますので、ご都合がつくようならぜひ参加してみてください。お返事お待ちしております。

鈴木

## 4.2 分析方法

断りメールを分析するにあたって、本研究ではその「構成」と「意味公式」に着目した。まず構成についてみると、一般的に、メールは宛名や挨拶、話題導入が行われる「開始部」、メールの具体的な内容を記述する「主要部」、終了の挨拶や署名が書かれる「終了部」という3つの要素から構成されている。本研究の分析対象となる断りメールも同様の構成をとっていたが、「断り」を行う主要部をさらに詳しくみると、「主要部の前置き」「理由」「断り表現の前置き」「断り表現」「断りの結び」という5つの構成要素が観察された(表2)。一方、意味公式とは、用いられる表現の意味内容によって表現を分類したものである。本研究では、藤原(2004)と宮崎(2007)による意味公式の分類にならいつつも、今回の調査で得られたデータを基に、一部新たに意味公式の種類を加え、表2のAからVにあたる28種類を設定した。ただし、これら28種類の意味公式の中には、重複した機能をもつものもある。例えば、開始部の話題導入で使用される「連絡のお礼」「肯定的な表現」「共感」は、いずれもラポールマネジメントにおける「積極的な話題提示、関係維持・促進」の機能を担うものといえる。一方、同じ開始部の話題導入で使用される意味公式でも、「話題の切り出し」や「情報の確認」は単に主要部の話題を提示するだけで、関係の維持や促進を積極的に行っているとは考えにくい。そのため、本研究では各構成において、意味公式をラポールマネジメントへの関与の度合いによって整理統合し、ポジティブフェイスに配慮したラポールマネジメントを行うものを「積極型」、ネガティブフェイスに配慮したラポールマネジメントを行うものを「消極型」、フェイスへの配慮が相対的

に少なく、単に情報提供のみを行うものを「一般型」と呼ぶことにする。

表2 本研究で扱う断りメールの構成と意味公式

	断りの構成	意味公式の機能	意味公式の種類	用例			
開始部	宛先	呼びかけ	宛先	鈴木先生	A		
	挨拶	礼儀、関係維持・促進	挨拶の言葉	こんにちは	B		
			自己確認	文学部の〇〇（名前）	C		
	話題導入	積極型	積極的な話題導入、 関係維持・促進	連絡のお礼	ご連絡ありがとうございます	D	
				肯定的な表現	大学祭、楽しみですね。	E1	
		一般型	一般的な話題導入	共感	準備とか疲れていない？	F	
				話題の切り出し	よさこい踊りの件ですが、	G	
	主要部	主要部の前置き	積極型	積極的な関係維持・促進	情報確認	踊りをされるんですね。	H
願望					参加したかったのですが、	I	
消極型			補償の行為	肯定的な表現	よさこい面白いそうやけど	E2	
				条件の提示	当日は空いているんですが	J	
理由		理由の説明	理由の説明	謝罪	申し訳ございませんが	K1	
				残念	大変残念なのですが	L1	
断り表現の前置き		理由の説明	理由の説明	曖昧な理由	都合がつかない	M	
				明確な理由	踊りの練習に参加できません	N	
断り表現		補償の行為	補償の行為	謝罪	申し訳ないのですが、	K2	
				残念	せつかくなのですが	L2	
		相手の意図に添えない表現	相手の意図に添えない表現、 関係維持・促進	明確な不可表現	明確な不可表現	踊りに参加できません	O
					婉曲的な不可表現	参加は難しいかと思います	P
断りの結び		積極型	積極的な関係維持・促進	代案	知り合いに声をかけます	Q	
				次回の機会の要求	機会があれば誘ってください	R	
		消極型	補償の行為	次回への意志表明	今度やります	S	
				謝罪	申し訳ございません	K3	
終了部	終了の挨拶	関係維持・促進	残念	残念です	L3		
			話題関連の挨拶	踊りの成功を祈っています	T		
	署名	名乗り	署名	また、ご飯を食べに行こう	U		
			〇〇（名前）名前	V			

断りメールの構成と意味公式の分類の例<sup>7</sup>（対先生、JJ）

鈴木先生（A 宛名：宛名）  
 ご連絡有り難うございます。（D 連絡のお礼：話題導入の積極型）よさこい踊りに参加したかったのですが、（I 願望：主要部の前置きの積極型）クラブの合宿があります。（N 明確な理由：理由）せつかくですが、（L2 残念：断り表現の前置き）今回の参加は難しいかと思います。（P 婉曲的な不可表現：断り表現）参加出来る人がいないか私からも声をかけてみます。（Q 代案：断りの結びの積極型）  
 では、踊りの成功を祈っています。（T 話題関連の挨拶：終了の挨拶）  
 〇〇（V 署名：署名）

<sup>7</sup> (A:B) では、A は意味公式の種類を表し、B は断りメールの構成を表している。この分類は筆者が単独で行った。



## 5 断りメールの構成の結果と考察

### 5.1 断りメールの構成における JJ と TJ の共通点と相違点

#### 5.1.1 断りメールの構成における JJ と TJ の間の共通点

断りメールの構成における JJ と TJ の間の共通点として、JJ と TJ はともに依頼者の社会的な立場にかかわらず、「宛先→話題導入→主要部の前置き→理由→断りの結び→署名」を多用していること<sup>8</sup>が挙げられる。また、断りメールの構成をさらに詳しく見ると、JJ と TJ は共通して「関係を維持する機能を持つ構成（主要部の前置きの積極型）→メールの中心部（明確な理由）→関係を維持する機能を持つ構成（断りの結びの積極型）」という構成を用いる。明確な理由は単に理由を伝えるのみならず、断る機能を持っていると考えられる。また、明確な理由は一つのラポールマネジメントの戦略であるとして捉えられる。というのは、明確な理由によって、断り手が「手伝いたくない」という気持ちなのではなく、物理的に無理であることを表明し、他者に配慮されたいという「公平の権利」を明示的に示すからである。つまり、明確な理由を用いることで、相手に自分の理由を納得してもらえやすくなり、ラポールを維持することができる。なお、明確な理由の前後に「関係を維持する機能を持つ構成」を使用するのは、それによってさらに関係を深めることができるためである。

#### 5.2 断りメールの構成における JJ と TJ の相違点

ここでは、JJ と TJ の間で、使用率に差が認められる構成・意味公式<sup>9</sup>について検討する。先生に断る場合、JJ は「断り表現の前置き」という構成を多用しているが、TJ の使用率は少ない。また、TJ は話題導入の一般型における「話題の切り出し」という意味公式の使用が JJ より顕著に高い。一方、友達に断る場合、JJ は TJ より話題導入における「肯定的な表現」を多用している。また、TJ は JJ に見られない断りの結びの積極型における「次回への意志表明」を使用している。上記の相違点の考察は、以下の学習者の言語形式（6.2 参照）と関連があるため、6.2 で詳しく述べる。

<sup>8</sup> 使用率の判定については、被験者数 15、使用率 50% を仮定したときの比率の検定（二項検定（片側）を使用）における有意確率  $p$  値を利用し、15-13 ( $p < .01$ ) を非常に高い、12-11 ( $p < .1$ ) をかなり高いという基準を基に、多用された構成を検証した。

<sup>9</sup> 使用率の差の判定については、比率の差の検定（フィッシャーの正確確率検定を使用）における有意確率  $p$  値を利用し、 $p < .01$  となるベアを非常に差がある、 $p < .1$  となるベアをかなり差がある、 $p < .2$  となるベアをやや差があるとし、この三者を差が認められるとみなした。本研究では、5.2 の断りメールの構成における JJ と TJ の相違点、6.1 の社会的な立場に応じた断りの調整、及び、6.2 の学習者の言語形式をこの観点から検討した。

## 6 語用論的能力の分析

### 6.1 依頼者の社会的な立場に応じた断り方の調整

JJ と TJ が先生と友達からの依頼を断る時に、それぞれの構成と意味公式において使用率に差が認められるものは以下の通りである。

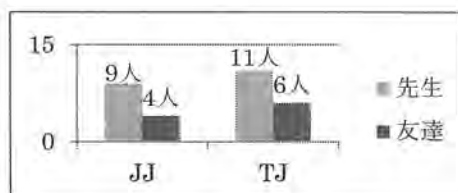


図1 構成「挨拶」の使用人数

図1から分かるように、JJ と TJ ともに先生に断る場合の方が「挨拶」という構成を多用している。両者が目上の先生に対する礼儀を示すために挨拶をよく使用していると考えられる。

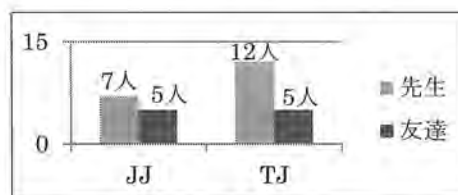


図2 構成「話題導入の一般型」の使用人数

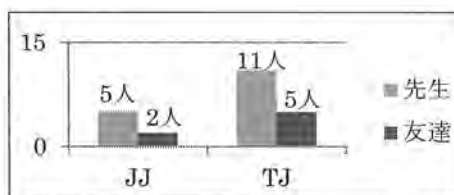


図3 意味公式の「G 話題の切り出し」の使用人数

上記のように、TJ は先生に対して「話題導入の一般型」という構成と話題導入の一般型における「話題の切り出し」という意味公式を多用していることが分かった。「話題導入の一般型」はその後の話を展開しやすいため、断りの意図を伝えるのに効果的であると考えられる。目上の先生と同等の友達を比べると、TJ は先生に対して改まった態度を示すため、より明示的かつ形式的な話題導入の一般型を用いると考えられる。

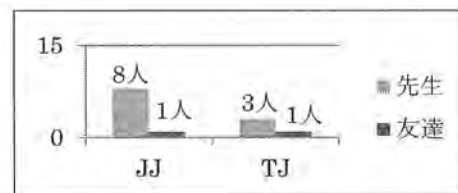


図4 構成「断り表現の前置き」の使用人数

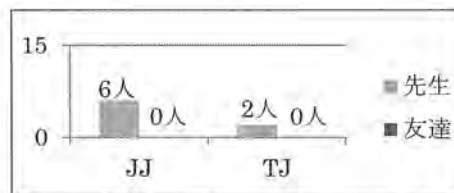


図5 意味公式「K2 謝罪」の使用人数

図4と図5にあるようにJJ は先生に対して、後続する断り表現を和らげる機能を持っている「断り表現の前置き」及び断り表現の前置きにおける「謝罪」をより多用している。JJ は先生の場合には「断り表現の前置き（謝罪）+明確・婉曲的な不可表現」、友

達の場合に「明確・婉曲的な不可表現」というように断り方を使い分けている。「断り表現の前置き」は断りに対する受け手のダメージを緩和する補償行為と捉えられる。

表3 JJの断り方の使い分け

先生からの依頼を断る場合	友達からの依頼を断る場合
申し訳ないのですが、(断り表現の前置き: 謝罪) 今回は参加できなさそうです。(断り表現: 婉曲的な不可表現)	無理やわ。(断り表現: 明確な不可表現)

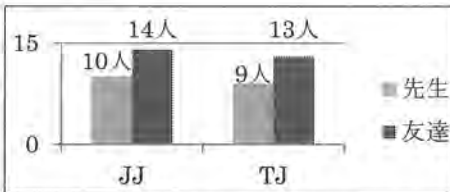


図6 意味公式「K3 謝罪」の使用人数

また、図6にあるように断りの結びにおける「謝罪」という意味公式は、JJの場合のみ、先生に対して使用されることがやや少ない。

その原因は、JJが先生には「断り表現の前置き」という構成で謝罪を使用しているの(図5を参照)、断りの結びでは、再度謝罪を言わなくてもかまわないと考えたためと推測できる。

6.1をまとめると、JJ、TJともに依頼者の社会的な立場を意識しており、依頼者の社会的な立場によって、ラポールマネジメントのストラテジーが使い分けられている。TJの断り方にはJJと共通した部分、及び、TJのみ見られる特徴的な調整の両方が確認された。その一方で、JJのみに検証された断り方の調整もある。

## 6.2 学習者の言語形式

ここで、「語用論的転移」、「アコモデーション」「学習者特有の言語形式」という観点からTJのデータを分析する。JJとTTのデータは比較ベースラインとして使用する。

### 6.2.1 語用論的転移

TJとTTの間には差が認められないが、TJとJJの間に差が認められる構成・意味公式は語用論的転移とみなす。

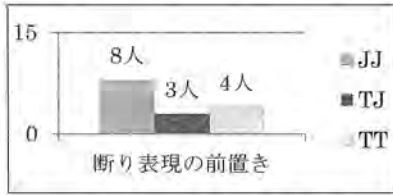


図7 先生の場合に見られる語用論的転移

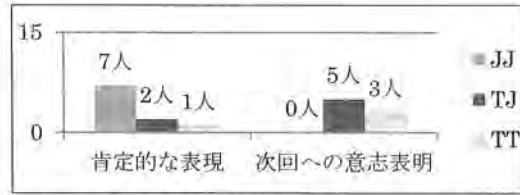


図8 友達の場合に見られる語用論的転移

図7と図8からわかるように、先生からの依頼を断る際に、TJはTTと同様に「断り表現の前置き」の使用率が少ないが、JJは「断り表現の前置き」を多用しているため、語用論的転移の言語形式が窺える。また、友達の場合に、話題導入の積極型における「肯定的な表現」、及び、断りの結びの積極型における「次回への意志表明」の使用がTTからの影響を受けた語用論的転移と確認された。TJは話題導入の積極型において、あまり「肯定的な表現」を使用せずに、「連絡のお礼」を多用している。また、TJはJJに見られない「次回への意志表明」を使用している。3者の語用論的転移の言語形式は5.2のJJとTJの相違点としても確認された。

### 6.2.2 アコモデーション

JJとTJの間には差が認められないが、TJとTTの間には差が認められる構成・意味公式はアコモデーションとする。

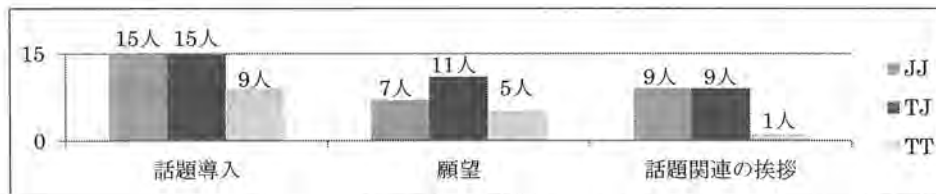


図9 先生の場合に見られるアコモデーション

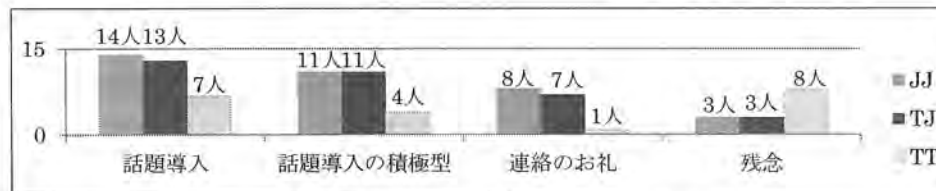


図10 友達の場合に見られるアコモデーション

図9と図10から先生の場合では「話題導入」という構成、及び、主要部の前置きの積極型における「願望」、終了の挨拶における「話題関連の挨拶」という意味公式、友達の場合では「話題導入」「話題導入の積極型」という構成、及び、話題導入の積極型における「連絡のお礼」、主要部の前置きの消極型における「残念」という意味公式の使用が、母語であるTTより、JJの使用に近づくアコモデーションが窺える。TJのフォローアップアンケートによると、断りメールを書く時に、日本語の授業などで学習した日本的な断り方の知識を利用し、日本人のやり方に近づけようとしているという。そのアンケートにおいて、TJは日本人の特徴的な断り方として、「最初から断り表現を言わずに、参加したい気持ち・理由などを言ってから断り表現を述べる」及び「断りの補足的な部分として連絡のお礼、願望、代案、謝罪を用いる」という点に言及している。よって日本的な断り方に近づけるために、TJが意識的に「話題導入」「話題導入の積極型」「連絡のお礼」「願望」を用いたと考えられる。また、TJは主要部の前置きにはJJと同様に「残念」をあまり使用せず、「願望」を多用している。

### 6.2.3 学習者特有の言語形式

TJとJJ、TJとTTの間に差が認められる構成・意味公式は学習者特有の言語形式とする。

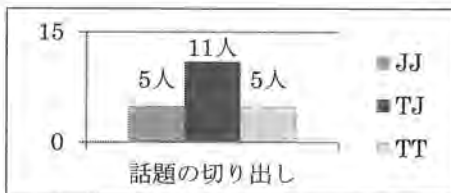


図11 先生の場合に見られる  
学習者特有の言語形式

図11によって、先生からの依頼を断る場合に、TJの話題導入の一般型における「話題の切り出し」という意味公式の使用がJJとTTより高く、学習者特有の言語が窺える。

「話題の切り出し」は、JJとTJの相違点(5.2)、及び、TJの特徴的な断りの調整(6.1)としても確認された。話題導入において、TJは「よさこい踊りの件ですが」という話題の切り出しを選択した理由は、その言い方が先生に対する改まった態度を示すからだと考えられる。

6.2で検討した学習者の言語形式では、学習者の母語から影響を受けた「語用論的転移」は比較的少ないことが明らかになった。TJは既習の知識を踏まえて、能動的に断りの構成・意味公式を選択しており、その結果として、「アコモデーション」及び「学習者特有の言語形式」が現れたといえる。

## 7 まとめ

本研究の結果から、メールを通して親しい先生・友達からの依頼を断る時に、日本人大学生とタイ人日本語学習者は共通して「関係を維持する機能を持つ構成→明確な理由（メールの中心部）→関係を維持する機能を持つ構成」という構成を使用していることが明らかになった。人間関係を維持・促進するラポールマネジメント面から見ると、上記の構成では、断りに対する理解の期待、及び、人間関係の維持という機能を持っている。また、学習者の語用論的能力について、依頼者の社会的な立場に応じた断り方の調整、及び、学習者が使用した言語形式という観点から分析した。学習者は依頼者の社会的な立場を意識しながら、様々なストラテジーを駆使してメールを書いている。今回分析した断りメールにおいては、語用論的転移は比較的少なく、実際にはタイ人日本語学習者が能動的に言語形式を選択する「アコモデーション」が多く見られた。フォローアップアンケートの結果が示す通り、学習者は断り方を「日本人と同じ」ように調整しようとしている。しかし、実際には日本人の断り方と同じような方法が選択される場合もあれば、日本人の断り方ともタイ人のタイ語による断り方とも異なる、学習者に特徴的な調整方法の選択に至る場合もある。

現在、日本語教育の現場では、学習者の語用論的能力を向上させるためには、単に学習者に典型的な断りメールの書き方を教えるだけでなく、学習者にそれぞれの場面における社会的な要因を意識させ、その要因に応じた適切な断り方を学習者が選択できるようになるための指導が求められる。断りメールを書く際、学習者に社会的な要因を意識させる指導法として、学習者に断り手と依頼者との社会的な立場を理解させた上で、それぞれの状況において、各々の文が何のために使用されたか、礼儀、関係維持・促進、補償行為などのどのような機能を持っているかを意識させることを提案したい。

最後に、今回の対象者は女性しかいないので、結果に偏りがあるかもしれない。また、データの信頼性を高めるために、協力者の人数を増やし、学習者の日本語能力と学習期間をできるだけ同じように設定すべきである。これらの点については今後の課題としたい。

## 参考文献

- Bachman, L. & Palmer, A. (1996). *Language testing in practice*. Oxford: Oxford University Press.
- Beebe, L. Takahashi, T. & Uliss-Weltz, R. (1990). Pragmatic transfer in ESL refusals. In R. Scarcella, E. Andersen, & S. Kristen (Eds.). *Developing communicative competence in second language*. Rowley, MA: Newbury House. pp.55-73.

- Brown, P., & Levinson, S. C. (1978). Universals in language usage: Politeness phenomena. In E.N. Goody (Ed.), *Questions and politeness: Strategies in social interaction*. Cambridge: Cambridge University Press. pp.56-311.
- Matsumoto, Y. (1988). Reexamination of the universality of face: politeness phenomena in Japanese. *Journal of Pragmatics*, 12 pp.26-403.
- Spencer-Oatey, H. (Ed.). (2000). *Culturally speaking : Managing rapport through talk across cultures*. New York: Continuum. 田中典子 (他) 訳『異文化理解の語用論』研究社出版、2004年。
- 生駒知子、志村明彦「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー：『断り』という発話行為について」『日本語教育』79号、日本語教育学会、1993年、pp.41-52。
- 岡崎 眸「日本語学習者における語用論上の転移再考」『東京外国語大学論集』50号、東京外国語大学、2005年、pp.97-109。
- 清水崇文『中間言語語用論概論－第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育』スリーエーネットワーク、2009年。
- タブンティナー ナッタモン、加藤好崇「タイー日の日本語接触場面における『誘い－断り』の発話行為」『東海大学紀要』30号、東海大学留学生教育センター、2010年、pp.29-41。
- 藤浦五月「日本人と韓国人の『断り』行動比較」『比較文化研究』78号、日本比較文化学会、2007年、pp.1-10。
- 藤原智栄美『日本語話者とインドネシア話者の『断り』に関する研究』大阪大学大学院言語文化研究科博士学位論文、2004年。
- 宮崎玲子「電子メールにおける依頼の展開構造－日本語母語話者とタイ人日本語学習者の対照研究－」『日本語・日本文化研究』17号、大阪外国語大学日本語講座、2007年、pp.175-184。
- 築晶子、大木理恵、小松由佳『日本語 Eメールの書き方』The Japan Times、2004年。
- ワラシー クランパー「留学経験がないタイ人日本語学習者の語用論的能力の分析－断りメールの構成から－」『日本語教育紀要』9号、国際交流基金バンコク日本文化センター、2012年、pp.39-49。
- ワンウィモン・ルンティエーラ「タイ人日本語学習者の『提案に対する断り』表現における語用論的転移－タイ語と日本語の発話パターンの比較から－」『日本語教育』121号、日本語教育学会、2004年、pp.46-55。